

郭沫若における転生の論理

中村 俊也

高行健（一九四〇～）は郭沫若（一八九二～一九七八）の文革に対する態度について彼を機械主義として非難する（『一個人的聖經』）。当人であればどう抗弁するのだろうか。目下中国では反省思考のなかで「九・一一」のちの文学者についても再評価が旺んになされている。その反省思考とは冷戦中の敵か見方かという厳しい二者択一的な判定ではなく、今日からその時をみて、これを比較の対象としてあるいは自由主義的な観点から未来を眺めたとき、その文学者になお学ぶべき点は何か、という当時からすると寛容な態度に貫かれている。現代新儒家の評価もこうした中でなされている。

郭沫若の有力な作品『漂流三部曲』『落葉』を見るに、日本・中国間、九州・上海間を往復する作者の足跡をうかがうことができる。同時に、日本語を多く取り入れている文体の中に表れる「悲劇の女性」「蘇生にこめた特徴ある思想」、態度に魅かれる、このような中に彼の生命についての強い姿勢がうかがわれる。

一九六〇年代当時における郭沫若に対する評価、それは文革の今日から見ての負の遺産には、当然のことながら言及していない。レヴェンソンの『革命とコスモポリタニズム』には、西洋流行の観念を紹介する敷衍者として瞿秋白

(一八九九〜一九三五)の他に郭沫若をとりあげる。レヴェンソンは反貴族主義的文章を儒家遺産の軽視だと一蹴したが、世界の中における中国の生彩は確固として胸中に置いた。故上原淳道の『「夜郎自大」について』は、氏の『読書雑誌』に奉った編者のただの献辞などではなく、郭沫若を評価する中で、当人もきつと目の当たりにしたろう日本の独尊的中国理解への片寄りを含蓄的に述べたものと想像される。

『郭沫若選集』は一九七六年夏、日中友好の記念に編集され始め未だ全巻揃わぬ恨みが有るが、刊行委員のリーダーの明確な言葉を私は手元に残していない。小生関係では、八年かけて(約束は三年と記憶する)『青銅時代』は出た。むろん巨筆郭沫若の全貌をうかがった上での訳業ではなく、先学に教えを乞いつつの必死の作業だった。遅延した仕事をひたすら悔いる中で些か弁論をくり述べようとする。

発表要旨

- 一、「転生」の意味。文人の作品の意味を過去にのみ限定せず、現状を捉える中で未来にかけて見据えること
- 二、レヴェンソンの『革命とコスモポリタニズム』における「国民と人民」、抗日をめぐる「国共合作」の解決
- 三、「Museumize」ということ。一過性の中に文化を閉じ込めること。長い時系列の中で作品を見ることの大切さについて再検討する

四、『「夜郎自大」について』(上原淳道)を考える

五、日中国交回復記念号としての『郭沫若選集』刊行の意味について

六、郭沫若の著作を総観し得る関鍵

- 七、『落葉』におけるロシア文学（ドストエフスキー）の影響
- 八、軍閥政府時代の日中関係 日本人の対中観について
- 九、多様性、重層性（一概に把握し得ぬ力量）を評価する、それは「転生」の底力として評価される
- 十、郭沫若のスタイルにつき考える